

2021年度・令和3年度 名桜大学FD第2回研修会実施報告書

文責 国際学群・FD委員 教授 宮平 栄治

1 背景と目的

背景

2020（令和2）年度に受審した大学機関別認証評価では「IR機能を促進するため、IR室で実施した調査分析について、組織的に教育の質向上やカリキュラムの改善に活用する等、全学的な内部質保証の仕組みのより一層の充実が望まれる」とのコメントがあった。

目的

FD第2回研修会の目的は次の3点である。

- ① 「評価のための評価」から「改善のための評価」へシフトを目指す。
- ② 前段階として、IR室設置の背景や目的について全教員が理解を深める。
- ③ IR室の背景や目的を「アセスメントポリシーに基づく学修評価」の現状について学ぶ。

2 開催日時：2021年・令和3年9月29日（水） 15:00～16:30（受付開始 14:30）

3 会 場：オンライン（Microsoft Teams）

4 対 象：本学専任教職員 非常勤講師

5 テ ー マ：アセスメントポリシーに基づく学修評価について

6 プログラム

時 間	内 容
14:30～（30分）	受 付
15:00～（5分）	【司会：FD委員 山本 健司】 開会のあいさつ FD委員長 木村 堅一
15:05～（70分）	【アセスメントポリシーに基づく学修評価について】 講義・実践会形式 ・名桜大学IR室の役割について 【担当：天願 健 IR室長】 ・可視化ツールからデータを読み取る（各自PCを活用したオンライン形式の実践） ・データ分析に必要な収集データの加工作業の実践（各自PCを活用したオンライン形式の実践） ・ICTツール向上のための取り組みとご協力依頼 【担当：立津 慶幸 IR室員】
16:15～（10分）	質疑応答
16:25～（5分）	閉会のあいさつ リベラルアーツ機構長 小番 達
16:30	終了
総評：執筆者（報告書）	宮平 栄治 FD委員

司会：山本健司 (FD 委員) 参加人数 79 名→91 名

開会のあいさつ

FD 委員長・学長補佐 木村堅一

スライドの共有によって、昨年度の 8 月 31 日の中教審による質保証システムを用いて説明があった。従来とこれからの比較を移行調査を比較すると、大学の内部質保証へ重点が移行しつつある。本学でも質保証を取り入れているが困難な面がある。

本学の質保証の一つがアセスメントポリシーである。具体的には、学生の学習成果の評価と測定を行う。学習成果の達成状況を検証する。具体的な施策と対策を行う。今回の研修の目的は次の 2 点である。

1.各教員レベルでは、科目レベル等である。成績分布と大学全体の成績分布を説明する。学生による授業評価について説明する。学部等は自己点検評価委員会で行う。今回は、アセスメントポリシーの理解である。アセスメントポリシーについては、外部に発信している。教員が、本学のシステム理解不足が懸念されている。

2.IR の機能と役割、現状の進捗状況と活用を紹介し、イメージし、最終的には教員が課題解決のために利用できるようにする。

また、今回の研修実施の背景には、昨年度の認証評価で、「全学的な内部質保証の仕組みの一層の充実が望まれる」と指摘があったように、本学の IR 活用は不十分である。

研修内容 アセスメントポリシーに基づく学修評価について

1. 名桜大学 IR 室の役割について

【担当：天願健 IR 室長】

沿革について説明があった。平成 29 年に IR 推進室発足、研修に参加した。全国の大学では、協力し、IR を行っている、平成 30 年に 12 月 13 日に規程を制定し、3 月 26 日に発足した。規程に基づいて、趣旨、任務および組織について等、および大学における組織の位置づけ、IR 室関連会議、例えば、学長等連絡会議の陪席などの説明があった。IR 室関連会議を通して、情報等の周知徹底を行う仕組みになる。学長の指示を受けて内容質保証を行っている。特徴は、本学の全組織と連携している点である。

今年度の計画は、学生情報の一元化、入学から卒業までの学習成果可視化、教育・研究データ一元管理システム開発、情報種集・調査研究を行う。

どのようなデータが使える、活用できるかは実際に利用した方が望ましいとの提案があり、次につなげる。

2. 可視化ツールからデータを読み取る (各自 PC を活用したオンライン形式の実践)

【担当：立津 慶幸 IR 室員】

大学の役割と IR の立場の概要を、IR の発祥であるアメリカの大学から説明があった。アメリカでは経営的視点から、質の高い研究と教育を支える土台が大学の教員である。大学教員の知りたいことや問題点を感覚ではなく、データで示すのが IR 室である。これらの仕組みの歯車を円滑に機能させるのが IR 室である。

日本に IR 導入が間もないため、多くの大学では少人数で運営している。そのため、関係者からの依頼が大量に持ち込まれるため即時に対応できないという問題があり、PDCA サイクルが円滑に機能しない問題点がある。本学では、室員が他の業務も兼任しているため、他大学同様に少人数で行うのは無理である。そこで、それぞれの教員がデータにアクセスし、データを見て、問題解決を意識する習慣を身につけることで少人数でも IR ができるという考えで本日の研修会を行った。

すでに名桜大学 IR 室の HP を作成しており、公開はしていないが、今後公開し、大学のデータを確認することができるよう仕組みに変える。不足するデータや必要なデータは IR 室に依頼するような体制を考えている。今後公開されるようなフェイスと参考画面のデモが行われた。次のデータ加工の入りを示した。

3. データ分析に必要な収集データの加工作業の実践（各自 PC を活用したオンライン形式の実践）

【担当：立津 慶幸 IR 室員】

データ加工作業のデモが行われた。例としては授業評価アンケートである。サムネイルで必要なデータが参照できるシステムの説明があり、受講生の自己評価データを用いた説明が行われた。全体評価と教員評価のグラフの説明、アンケートのヒストグラムの説明があった。変化の背景として無記名性など変化など制度の変更などの可能性があった。エラーデータは、“0”で示されており、分析の際は、各自で0を削除し、行うよう説明があった。

1 枚目は、指標の説明と使用が掲載されている。

生データとグラフについてのデモが行われた。

2 枚目は、グラフ加工については、オプションについて説明があり、必要・不必要な情報の扱い方の説明があった。報告書の内容についてグラム等の加工の説明があった。また、教員名を入力すると、教員の担当する科目に関する受講生数、学生からの評価などが表示される。

3 名目は、生データについては、例えば、同じ科目を担当している教員との比較が可能である。活用方法としては、評価の高い教員の授業参観などの活用方法が提案された。教員の所属や学科でも示されるようになっている。リベラルアーツ機構については、所属の名義尺度がないため、リベラルアーツ機構の教員に関する扱い方の注意事項があった。

4 枚目は、科目 GPA でデモが行われた。経年変化である。ヒストグラムによる分布(教職科目を含む資料と含まない資料)などを1分ほどの時間設定し、各教員に体験させた。リセットボタンをクリックすると初期データに復帰する。リセットボタンをクリックしない限り、データは保存される。この機能の応用例として、単年度比較する場合は、別のブラウザを開き、設定することでグラフ等を比較することができる。

5 枚目は、講義の全体をまとめた平均を表示している。応用例としては科目 GPA をクリックすると科目 GPA の高い教員を検索することができる。活用を促すため1分ほどの時間設定し、各教員に体験させた。

他の使い方としては、受講学生数の多い週や時間帯が分かり、科目配置の編集にも活用できる。

2 つめのツールで、1~5 ページある。ここでは、学生がどのような成績を辿ったかの分布が示される。入学年度の学生数などが表示される。教員の場合は、所属と学科が反映されないが、学生は、所属と学科等が反映される。GPA のヒストグラムが示される。

他の詳細分析では、どのような学生が GPA の学生の質的データで分析することができる。質的データとしては入試区分、出身地等である。学群で、沖縄県内学生の GPA の状況のデモが行われた。他には、沖縄県内の出身高校でもタブをクリックするだけで分析ができる。応用例としては GPA の高い高校を検索することで、今後の対応策等への応用が考えられる。活用を促すため沖縄県内と沖縄県外の GPA 分布比較を、各教員に促した。ただし、単純比較はできない。

また、卒業生については、これまでの GPA の蓄積がない年度があるため、データを扱う際は注意が必要である。活用方法では卒業生の分布と在学生の分布比較で、学生の変化が分かる。全体の傾向を見たい場合は、3 番を使う。

4 番は、表と地図で GPA が分かる。円の大きさが学生数、濃淡で GPA 値を示している。学生の分布状況で学生募集の戦略に使える。

5 番は、都道府県、入学年、平均 GPA に表示できる。

4. ICT ツール向上のための取り組みとご協力依頼

【担当：立津 慶幸 IR 室員】

順次、データ活用を考えている。各部署でツールを利用し、使いやすさ等を意見や要望を寄せていただきたい。

追加として若年層の ICT スキルの説明があった。6 月から ICT ツールの勉強会を行っている。QR コードで参加の申し込み、過去の状況について紹介があった。

16 時 30 分

質疑応答

司会は、授業評価アンケート結果への教員のコメント作成の際に本ツールが使えたらコメントの質の向上に大いに役立つのではないかという感想を述べた。さらに、過年度卒の学生のデータに関し除籍、退学などの理由で卒業しなかった学生のデータを除外して分析することが可能であるかどうか質問した。

回答 立津 IR 室員 現状では除籍や退学に関する情報が含まれていない。今後追加データとの一つとすることも検討したい

質問 木村

成績分布データで本学ではかなり高い状況にある。GPA で3以上いるが、教育の質保証の観点で、質が保証されているかどうかを考える必要がある。到達目標が低いのかを検討する。他大学では、質保証の観点から成績のキャップ制を設定して、学長の考えを聞きたい。

回答 学長

GPA が秀や優に偏っている感は否めない。キャップ制導入は、学生の不満が高まる恐れがある。個々の科目の学生の主観的な評価を盛り込み、学生のアンケートを加味し、変更する方法が考えられる。学生の労力と成績の相関や蓋然性が求められる可能性がある。今後、アイデアを出し合って改善したい。

司会

米国では GPA の高い大学は、二極化している。つまり、超難関大学か、底辺大学である。(大学によっては、GPA3.0 を維持できなければ次のセメスターの登録を認めないことなどによって多くの学生を kick out し、高い研究/教育のレベルを維持しているところもあり、そのような大学の GPA の平均値は低くなる。) GPA の値のみによって大学の研究/教育を評価することはできず、他の側面について考えることも必要と思われる。

他の教員からも意見をいただきたいが、時間となったので終了する。アンケートへの回答を要請するアナウンスがあった。

閉会のあいさつ

リベラルアーツ機構長 小番 達

評価のための評価ではなく、改善のための評価、ステップゼロからステップ3へと進んでいる、データの使い方、受講生分布では過密などは興味深く拝聴した。学生からも講義が登録できないとの苦情が寄せられているため改善にしたい。全国の GPA 分布も興味深い説明であった。ヒアリング調査では、学習センターでの学習支援の効果について質問があった。入学前の効果についても質問があった。これらの質問を可視化が難しかったが、今回の正課の GPA や授業用アンケートとの関連性を考えたい。各教職員には、データを使い、利用することを推奨したい。データと課題解決の歯車が回転できるよう教職員の協力が必要となる、引き続き高い教育の質保証に向けて努力したい。

総評

宮平栄治

IR 室の努力によって、教育内容という質的データと GPA という量データのデータベースが構築されて事は第一歩である。今後は、説明でもあったように、教職員が興味関心を抱き、改善の方向性を提案することが望ましい。具体的には、入試区分や教育の内容の質的データ化、質的データと量的データの関連性を測定するコンジョイント分析等の統計手法による分析などである。

GPA 分布に関しては、学生が、卒業後も成長が期待できる「真面目さ」(目標と規律を持って粘り強くやり抜く

資質)非認知能力と GPA との関連性も考える必要がある。日本の課題として、「真面目さ」に起因する「エンゲージメント」(仕事に高い熱意を持って取り組み活力)が、蘭イフェクトリーの2020年の調べでは調査対象57カ国・地域中で最低である。

2019年・令和元年の「労働経済白書」では、エンゲージメントの言及し、その中で、日々の働き方に関する上司からのフィードバックやキャリア展望の話し合いの重要性を指摘している。大学に置き換えるならば、日々の学習に関する教員からのフィードバック(日々の助言や成績も含まれるだろう)、レポート、卒業研究、学習の進め方や卒業後の教員と学生の話し合いになる。

本学の偏りのある GPA 分布が、学生と卒業生の「真面目さ」と「エンゲージメント」にどのような影響を与えているかを客観的に考えなければ「角を矯めて牛を殺す」ことになりかねない。

以上

